

37

最終回「おやさまを求めて」

“おやさまを求めて” 中山正直

Happistで
チェック!

01 たすけ一条の親心

おやさまが現身を隠されたと聞かされた人々の衝撃は、いかばかりだったでしょうか。『稿本教祖伝』には、この時の人々の心情を、「立って居る大地が碎け、日月の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じた」と表現されていますが、文字通りこの世の終わりのように感じられたことでしょう。

一同は、茫然自失となりながらも、内蔵の二階で飯降伊蔵先生を通しておさしづを伺わされました。すると、次のようなお言葉がありました。

「さあ今からろくくの地にする。これまでに言ってきたことは、実の箱に入れておいたが、いよいよ親神が扉を開いて出て、表へ現わしていく。子供可愛いゆえに、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけをするのである。その神の働きをしっかりと見ていよ。今までとこれからと、どう違ってくるかしっかりと見ていよ。

(略)これまでから子供にやりたいものもあった。なれども、思うようにやることができなかった。これから先、だんだんにその理を渡そう。」(大意)

前日に「扉を開く」と仰せられたのは、親神様がいよいよ広くたすけに出られるとの意でありました。そしてそのために、おやさまは、これからはお身上の制約なく、世界中を駆け巡ってたすけをすると仰せくだされたのです。しかも、これまでからも人々に渡してやりたいと思いながら、なかなか渡せずにいたもの、即ち「さづけの理」をだんだんに渡していく、と仰せられました。

一同は、このお言葉を聞き、おやさまが現身をお隠しなるという大変な事情を見せられたのも、親神様の世界一れつをたすけるための深い深い思召であったことに気づかされました。そして、お姿を挾せぬ寂しさはあります、これからも変らず、むしろ、どこにいてもご存命のお働きを頂戴できるのだと、胸を撫でおろすとともに、大きな安心と頼もしさを感じさせていただいたのでした。

思えば、おやさまは、月日のやしろにお定まりになられた天保9年以来、50年の長きにわたり、親神様のお心のままに、この道をお付け下さいました。

その道中は、決して平坦ではなく、貧の底に落ち切られ、周囲には反対され、警察などの干渉圧迫を受けながらの険しい道すがらでしたが、おやさまは、ひたすら一つの人間をたすけ上げたいとの子供可愛い一条の親心でお通りくだされ、根気よく

人々を導かれました。このおやさまのお心は、現在も何ら変わりはありません。

02 おやさまはご存命

「さあ／＼これまで住んで居る。何処へも行てはせんで、何処へも行てはせんで。日々の道を見て思やんしてくれねばならん。」(おさしづ 明治23年3月17日)

と、おさしづにありますように、おやさまは、^{とこしえ}永久に元の屋敷にお留まり下され、日夜をわかたず、たすけ一条の上にお働きくださっています。

教祖殿で、おやさまの御前に座させていただくと、いつもじんわりと心に温かみを感じます。つらい出来事や悩み事も、ありのままをご相談申し上げると、不思議と心が治まり、前を向く力をいただけます。

また、身上に悩みを抱えておられる方に、おさづけの理を取り次がせていただくときには、どこにいても、そこにおやさまがおいでくださり、撫でてくださるような感覚を覚えます。

お見せいただく不思議なご守護はいうまでもなく、いつもどこでも、おやさまのご存命のお働きを感じさせていただけるのは、常におやさまが私たちを親心いっぱいに抱きかかえてくださっているからだと思います。この温もりに触れる喜びこそ、おやさまがご存命であるとの確かな実感であり、この道を通る私たちの原動力であると思います。

03 おやさまを求めて

明治20年以後、お道は、ご存命のおやさまのお導きによって、歴代の真柱様を中心に、その歩みを進めてきました。

特に10年ごとのおやさまの年祭には、それを節目として全教が一手一つにたすけ一条の活動に取り組み、少しでも心の成人をさせていただき、おやさまにお喜びいただこうと励んできました。

そうした先人の、おやさまを想い、そのお心に近づこうとする努力の上に、この道は今まで伸展してきたのです。

親神様の思召される世界一れつの陽気ぐらしには、まだまだ途方もない時間がかかるだろうと思います。だからこそ、大切なことは、この道を通る一人ひとりが、おやさまの教えを正しく学び、真っすぐに実行し、そしてしっかりと繋いでいくことだと思います。

私たち一人ひとりが、おやさまの教え子としての自覚を持って、明るく勇んで陽気ぐらしへの歩みを進めていくことを、おやさまは楽しみにして下さっています。

これからも、おやさまのお心を求めて、ともに歩ませていただきましょう。